風の工房　アトリエFuu　OIDEYOハウス

ひびのこと

Vol.5

文字　ひびのこと：尾崎仁一　風の工房：宮下宜續　アトリエFuu：田中桂　OIDEYOハウス：中島惠津子

「表現をひきだす音楽」

アトリエＦｕｕでは、月に一度音楽療法を行っています。季節の歌を歌ったり、楽器を鳴らしたり、パネルシアターを見てゆっくりしたり等々。参加されているご利用者様も一緒に歌ったり、のんびり鑑賞したり、みなさんのお好きなように参加していただいています。音楽療法後は「楽しかった」「次はいつやるの？」等、次回の音楽療法を楽しみにしてくださっています。音楽療法を行う私にとって、とてもうれしい言葉です。

音楽療法とは言うものの、一体どういうものなの？と疑問に思われる方も多いかと思います。音楽療法とは、「音楽の持つ生理的、心理的、社会的働きを用いて心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、問題となる行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」と定義されています（※日本音楽療法学会ＨＰより引用）。定義の中の音楽の生理的働きは「脈拍・筋・皮膚温の変化、心身のリラックス」、音楽の社会的働きは「集団化・一体化、社会性・協調性」、音楽の心理的働きは「慰め励まし、感情の誘発・発散・高揚・沈静、浄化」、となります。一概に“音楽”といっても、使い方によって様々な作用があります。

学生時代の実習先でこんなことがありました。発言や発声、自己主張が少ないある一人の女性利用者さんにスポットを当て、その方の好きな都はるみさんの「大阪しぐれ」という曲を用いてセッションを行ないました。歌手の名前を聞いたりして発言の場を提供した所、結果として、セッション時に発言が増えたり歌唱時に声を出して歌って下さる事、明るい表情である事が増えました。また、少しずつ昔の話もしてくださるようになりました。ご本人の好きな曲を用いてセッションを行なう中で、感情の表出や表現力の促進が見られました。これは、前述した音楽の持つ心理的・社会的働きになります。

“音楽”の中でも、“音楽活動”と“音楽療法”には、違いがあります。音楽活動はみんなと一緒に楽しく歌ったり、カラオケで歌う・聞くなどして気分がすっきりしたりすることがあります。音楽療法士は、音楽活動を通して「今・ここで」楽しく対象者と関わったりするだけではなく、今そこにいる対象者の今後の変化を予測して、今どんな関わりをしたらその人たちを最もよい方向に導けるかを考えて音楽活動を行います。また、音楽活動で出来るようになったことが、日常場面でも出来るようになることを目指して音楽活動をしています。

難しい話ではありましたが、始めは、楽しく歌う・楽器に触れる、落ち着いた気持ちで過ごすことが出来ればよい、と私自身は考えています。参加されるご利用者様の笑顔・歌声が私の音楽療法を行う上での原動力です。音楽療法で多くの方の笑顔を引き出すことが目標です。もしよろしければ、アトリエＦｕｕへ見学にいらしてください。

（アトリエ Fuu　田矢）

「中島さんのきもち」

中島さんは「インターネットが大好き」「誰にでも挨拶するのが大好き」で、「突然の大きな声や音が苦手」「自分の気持ちが相手にうまく伝わらないことが多い」といった方です。OIDEYOハウスを10年ほど利用していますが、紆余曲折がありつつも過ごす環境や日課は年々「良い感じ」にアップデートされています。ただ、何度かのアップデートのきっかけは、スタッフがなかなか気づくことができなかった「ちょっと嫌なんだけど、これ」というご本人からの無言のメッセージでした。ご本人にからは「もうちょい早くわかってほしかったんだけどな、まったく」といつも言われているような気がします。

数年前、ある苦手な方を見ると必ず不調になる時期がありました。高い声が頻繁に出たり、突然駆け出したりして、その方の声や突然の行動が本当に怖かったようです。物理的に会わない事が最善の解決策ですがそうもいきませんので、ご本人の活動拠点として個室を用意しました。個室があれば、何かあっても「逃げ込める」安心感を得ることができます。その後は、再び穏やかに過ごすことができていました。

ところが、2年程経過した頃、個室の壁紙を全てはがしてしまう、という出来事がありました。要因としては、ある時期まで安定して取り組めていた仕事が急に無くなったことや、代わりに取り組んだ仕事がわかりにくい、などといった事が考えられましたが、スタッフ間で話し合う中で「最近、昔より他の人からの声掛けに敏感になっている気がする。表情が硬くなった気がする」という事に気付きました。この気付きから「個室にいる時間が長くなることで、逆に過敏さを助長させてしまったのかもしれない」「あそこ、寂しいのかもしれない」と想像し、その後ご本人の活動拠点を個室から大勢の方がいるスペースへ移動しました。ただ、パーテーションがあるので自分のエリアは保障され、他の方の気配を感じながら過ごせるようにしました。同時に、取り組む仕事は見通しが持ちやすいものだけに限定するようにしました。「だいぶ表情が柔らかくなった」「できる作業が増えた」とスタッフは感じています。ただ、これで中島さんが本当に安心し満足したかどうかはまだわかりません。

当初、個室を作ることで安心感を得ることはできましたが、安心が満たされれば次は「グループに所属し仲間を求め」たくなると言われています（マズローの欲求5段階説、というやつですね）。壁紙をはがしてしまう前に、もっと早く「安心の次」をお手伝いすればよかったと反省しています。

今回の一連の支援では、日頃のご本人とのやりとりから様々なメッセージを受け取り、障害特性や心理学などといった知識を踏まえつつ、ご本人の立場で気持ちを想像し速やかに対応する事が大切だと強く感じました。でも、ご本人からすればまた「ちょっと違うんだよな」といったことがあるかもしれませんが、そういった支援を積み重ねることで、より「良い感じ」の日々に近づけるよう努めていきたいと思います。

（OIDEYOハウス　久保）

雷ティッシュケース　￥300

キーケース　￥800

ピンちゃん　￥1,000

雷ストラップ　￥200

アニマルブローチ　￥400

雷サイフ　￥1,500

雷カードケース　￥980

風鈴　￥1,000

ぴかたんブローチ　￥400

リボンのヘアゴム　￥450

パパパしおり　￥100

ポシェットバック　￥1000

雷バック（大）　￥2,980

ランチバック　小￥1,200　大￥1,980

プチバック　￥1,080

ネームホルダー　￥300

福祉の雑貨

独自の特色を活かした商品開発、制作、販売を全国各地様々な福祉施設が行っていることをご存知だろうか。かりがね福祉会の「OIDEYO ハウス」「風の工房」「アトリエ Fuu」でもご利用者様が社会と繋がりを持つこと、またお金を稼ぐといくことを目的に、商品や作品の販売を行っている。

「福祉の雑貨」と聞くと「福祉施設だから買ってあげよう」と言うような感情が交じった気持ちで購入されていくイメージがあり、それに対してモヤモヤする感情を抱いていた。

しかし、最近では質が高く、唯一無二の商品つくりをしている施設や企業とコラボレーションした商品が販売され、多種多様な拡がりをみせている。気になる商品をよくよく見ると福祉施設でつくられていたり、企業とコラボした商品だったということもある。それぐらい身近なものになってきている。

風の工房のアート活動も OIDEYO ハウスの雷シリーズもはじまりは余暇の遊びからだった。ご利用者様の表現をどうにかして形にする。そして、社会に発信し、それが認められたり、褒められる。そうして、自信や活力、日々の楽しみに繋がって行けるように真剣に遊びながら今日もみんなで手や頭や心を動かしている。そんな「福祉の雑貨」を是非手に取って見てもらいたい。

（風の工房・アトリエ Fuu・OIDEYO ハウス　佐田）

ポーチ　￥1000

W ファスナーポーチ　￥900

ミニポーチ　￥550

あおだま　￥1,000

ネックレス　￥500

ミサンガ / ブレスレット￥200
ビーズ付きブレスレット￥300

ペンケース　￥800

ペットボトルホルダー　￥680

カミナリ FLAG　￥1,000　ミニ￥500

どうぶつケース　￥1,000

スマホケース　￥800

ミニミニケース　￥800

ブックカバー　文庫　￥900　コミック　￥950

どうぶつケースミニ　￥1,000

じんいちさんのぽち袋　￥150

作り手の顔

中島　惠津子

Nakajima Etsuko

OIDEYO ハウス

　カラフルなストライプ模様に小さな飾りが散りばめられている。家や草花、花火にも見えるし幾何学模様の絵画のようにも見える。誰かに作品を褒められると「飾りがなくっちゃね、やっぱりね。寂しいでしょ」と照れたように笑っている。

　信濃毎日新聞のペット紹介欄や番組表をチェックするのが毎朝の日課。動物や美味しそうな食べ物の広告があると「あぁ～、可愛い。」「美味しそうだよ。でも高いよね。」と目を輝かせる。気になる記事は切り抜いて大事にティシュペーパーに包み、ビニール袋の中へコレクションしている。

　OIDEYO ハウスには、事業所の周辺をみんなで散歩する「ウォーキング」の時間が毎朝ある。道に落ちている何てことない小枝を歩いている時に見つけると「可愛い」と拾い、決まった石の上にそっと置き、本当に気に入ったものはお持ち帰りしている。自分の好きだと感じたことを大事に大事にしている。

　OIDEYO ハウスにくる以前は様々な仕事をしていたそうだ。大人数のご飯を作るのは大変だったと話してくれた。もしも今長いお休みをとって、旅行できたらどこに行きたいかと質問すると「そんなに長く休むとお金なくなっちゃうから、仕事してた方がいいよ」と笑っていた。好きなものに囲まれて、褒められる仕事ができて、お金を稼いで、美味しいご飯を食べる。そんな普通の穏やかな日々がいいのだと思わせてくれた。

雷バック（中）　￥1,080

作り手の顔

高寺隆浩

Takatera Takahiro

OIDEYO ハウス

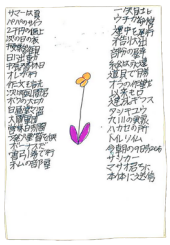
高寺さんには、自分の確固たる世界がある。OIDEYO ハウスでの作業は、裂き織りや雷シール、整経（*1）、商品作りの補助など多岐にわたっている。布を細く紐状に切り裂き、それを緯糸として織り込む「裂き織り」は、布の模様や色が織地の柄になり生地の質感はしっかりとした織り上がりになる。布を切り裂き緯糸に仕立てるところから一貫して彼自身で行っている。現在 OIDEYO ハウスで裂き織りをしているのは彼だけだ。ポーチや鍋敷きなどの商品に重宝されている。他にも整経、動物ポーチの制作補助、糸巻き（*2）と一日の中で時間を区切り、複数のことをこなしていく。１つのことだけを行うより、短時間に複数のことをした方が疲れないことから、この１日の流れになっているそうだ。

また、絵や文字に関しても面白い作品がある。広告を小さく切った紙に予定を几帳面に書いたものを毎日 OIDEYO スタッフに手渡している。そうした、彼自身から生まれてくる日々の営みが面白く、興味深い。

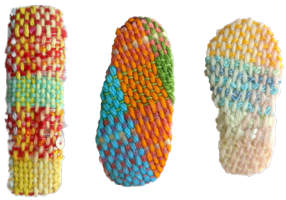
また、数十年前に彼が書いた絵葉書も素敵だ。花の絵の周りに単語が書かれている。よくよく見ると「これは？」と言うような言葉たち。全て「クレヨンしんちゃんの漫画の中からの言葉」が書かれているそうだ。どうしてその単語が選ばれて書かれたのか分からない。だからこそ、羅列された文字を見るとこちらはドキッとしてしまう。高寺さんにはまだまだ隠された世界があるように思えてならない。

（*1）整経…織りをするための工程のひとつで経糸（たていと）を整える作業
（*2）糸巻き…緯糸（よこいと）にするために古布を紐状にきる作業

裂き織りトートバック　￥1,800



手書きのポストカード



Fumiko ori ヘアピン　￥600

ちびたま　￥300

作り手の顔

村澤ふみ子

Murasawa Fumiko

風の工房／アトリエ Fuu

風の工房では機織りを、アトリエ Fuu では運動とアート活動と２つの事業所を利用している。機織りをしたいという明確な希望があり、風の工房を利用し始めた時からずっと織りの制作に取り組み続けている。機織りをしているとき、全ての神経が機織りに集中している。色ごとに織り込む緯糸の本数は、決まっていて１本１本数を数えて確認している。間違っていたり、納得できない仕上がりの時は、躊躇なくやり直す。制作に真摯に向き合う姿勢は観る人にも伝わる。作品を手に取って涙している方が展示会でいた。この織りは本当に素晴らしい、と。

自分の織り生地が可愛い商品になって、たくさん売れて欲しい。それを実現できるように、これまでスタッフは商品開発をしてきた。アクセサリーに加工したり、そのままコースターやマフラーとして販売したり。また、アート作品として額装し展示したこともある。「どうかな？」とアドバイスを求めると「可愛い」「う～ん…」と率直な意見をくれる。商品が売れると「やった～、嬉しい」と拍手しながら控えめに笑って喜んでくれる姿を見ると、それがまたスタッフのやる気にも繋がる。

「風の工房の商品がたくさん売れますように」といつかの七夕の短冊に書かれていた。自分のことだけではなく、風の工房やアトリエ Fuu の仲間のことも思い遣ってくれる。誰かが困っていると自然に「大丈夫？」と声をかけ、道で出会う動物には「可愛い～」と目を奪われている姿をよく見かける。可愛いものが好きで、自分の中に強い芯も持っている。彼女の作品からはその人柄が滲み出ている。

作り手の顔
宮下真澄
Miyashita Masumi

花ふきん　￥400

アトリエ Fuu

アトリエ Fuu を利用する前は、介護の仕事をしていた。病気を経験し、かりがね福祉会を利用するようになった。３人の子どもを育て、今は携帯の中のお孫さんの写真を「可愛いでしょう～」と仲間たちに見せると、頬が緩みなんとも幸せそうな表情になる。

アトリエ Fuu でも「お母さん」のような存在だ。何か困ったこと、聞いて欲しいことがあると「真澄さーん」と話にを聞いて欲しくて、彼女のところにいく。「うんうん」と耳を傾け、「そうだよね」とまあるく明るく笑いながらその気持ちを受け止めてくれる。逆に自分自身に困ったことがあれば、スタッフに相談して、「お願い」と甘えることもしっかりとできる。頼もしい存在だ。持病のため運動が必須で現在は運動をメインに活動しているが、縫い物やミシンもお手のものでアトリエ Fuu クラフト部門の主力メンバーの１人である。

数年前のアトリエ Fuu では針仕事ができる方が集まってお話しながら「花ふきん」をつくっていた。晒しの布に一針一針糸を刺してゆく。現在はそれぞれ体調や環境が変化し、花ふきんを制作しているのは、ほとんど宮下さんだけになっている。スタッフが図案を書き写して、その下絵の線にそって刺繍をしていく。最近では目の見えにくさや疲れもあり、制作が進まないときもある。それでも丁寧な仕事はぶれず、綺麗な花ふきんをつくり続けてくれている。最後に四隅の布を折り込みミシンで仕上げをする。その作業も自分で行っている。子どものために布小物をつくってきたその技術は、いまアトリエ Fuu のグッズ制作にいかされている。

作り手の顔

中村豪

Nakamura Takeshi

風の工房

男女から好かれて器が大きいと聞いてパッと浮かぶのが中村さんだ。私は彼以上にこの言葉が当てはまる人を知らない。

言葉でのコミュケーションは少なく、大きな手のひらでギュッと握り返すことで気持ちを伝えてくれる。とても恥ずかしがり屋で、相手を傷つけたり、嫌なことをしているところを見たことがない。誰からも好かれ、信頼されている。

彼がつくる作品たちは、見るとついふふッと笑ってしまうものが多い。陶芸、絵画、お張子と幅広い表現活動をしており、一貫して「顔」がテーマになっている。下がり眉に困り顔、口を閉じて不満げな表情。これらがよく描く「顔」だ。ニコニコ顔になることは少ない。

自分の気持ちが上手く伝わらなかった時、彼は止まり下を俯き顔を覆い「そうじゃない」と伝える。言葉で「どうしたい？」と聞いてもなかなか言葉でのコミュニケーションは難しい。そうなると「何故そうなったのか」をスタッフは頑張って想像する。行動の前後や背景を観察し表情、仕草、手を握る強弱とあらゆる感覚を駆使し想像する。言葉は時として全く当てにならない。「こう？」と聞いて「そうだ」と行動にしたことが、全く言葉と一致しなかった、と言うことはままある。

コミュニケーションの方法は言葉だけではないと知りつつも、つい言葉に頼ってしまう。言葉で伝えられない伝わらない時、この作品たちのように下がり眉で困り顔になっている自分がいる。だから、この「なんとも言えない顔」に愛着を感じるのかもしれない。

いといとマット　￥500

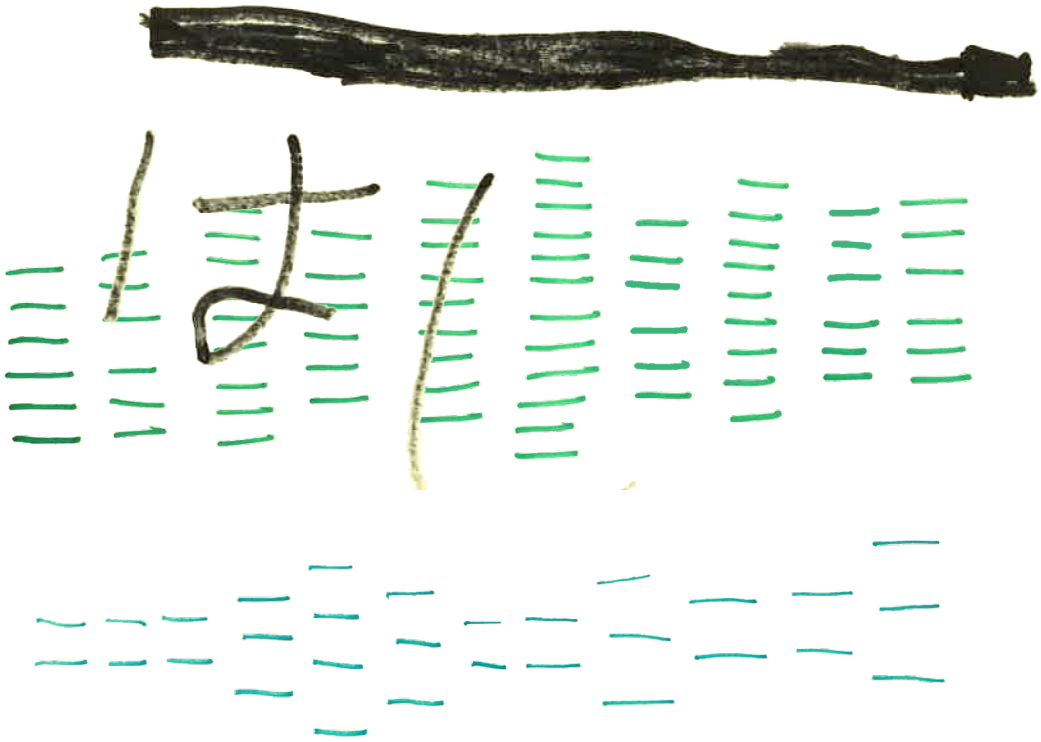
おやだま　￥1,500

陶器ヘアゴム　￥200

針山くん　￥1,000

陶器ブローチ　￥300

タケコノコ　￥1,100



work by Miyashita Yoshitsugu and Koda Ryota

この視点どうでしょう

episode of WARIBASHI

法人の理念ハンドブックの基本方針①の大切にすべきキーエッセンス②に「利用されている方の長所をさらに伸ばし、できるという可能性を拡げていきます。」という文言がある。また、風の工房の今年度の事業計画に「ご利用者様の「できる」を拡げ、自信を持って生きていけるよう支援する。」という重点目標を掲げた。

この、「できるという可能性を拡げていく」や「できるを拡げる」字面もいいし、口で言うことは簡単なことではあるが、実際やるとなったらかなり難しいことなのではないかと思う。実際可能性が拡がるとはどういうことなのだろうか？様々な考え方はあるかと思うが、私は選択肢が増えることなのではないかと思っている。

できることが多くなる→活動や余暇の幅が広がる→人生が豊かになる

簡単に言ってしまえばこんなイメージだろうか？まずはご利用者様のできることを把握し、できることはご自分でやってもらう中で長所を伸ばしていくことが重要だとは思うが、一概にそうも言えないのではないのではないかと思う。

例えば、あるスタッフは食事の時、そのご利用者様が割りばしを渡してくるので、ご自分で割りばしを割れないと思っていつもスタッフが割っていた。他のスタッフはそのご利用者様がご自分で割りばしを割れるのを知っていて、ご自分で割っていただいていた。可能性を拡げているのはどちらだろうか。一見ご自分で割っていただいている後者ではないかと思うが、果たして本当にそうであろうか。ご利用者様は割りばしを渡してきているので、きっと割ってほしかったのではないか。それならば割って差し上げることもその方の人生を豊かにしているといえるのではないか。ご利用者様の多くは「あまえてはいけない」と思っている方が大半で、ましてや手伝ってほしいときに「手伝って」と言える方のほうが圧倒的に少ないのだから。だからといってできることをスタッフがやり続けてしまうことも、逆に「できるが狭まる可能性」ももちろんある。その見極めが難しいし、それが私たちの支援のプロとしての見せどころといったところか。割りばしなんてどっちが割ったっていいだろうと思うが、それが日々の積み重ねだ。大切なのは、割りばしをご自分で割れることは知っている前提で、こちらで割って差し上げるのかご自分で割っていただくのか、どちらの方がそのご利用者様の可能性を拡げ、人生を豊かに送れるのか考えることではないか。

私たちの仕事はご利用者様の人生をお預かりしているといっても過言ではない。ご利用者様の人生に深く関わることもできれば、あまり関わらなくてもなんとなく日々は過ぎていく。ご利用者様も私たちスタッフも日々状況が変化していく。きっと可能性は無限大に拡がっている。（風の工房　工藤）

「あそび心を大切に」

障がいの有無に関わらず、誰もが地域の一員として共に生きることができる地域の在り方は「共生社会」と呼ばれ、障害者施策における基本理念として位置づけられている。共生社会において、全ての人が役割を持ち、主役となれる地域の在り方を目指す考え方は、福祉施策の基本となる社会福祉法にも定められ、障がいのある方は一方的に「ご利用者様＝支援を受ける人」ではなく、多様な社会の中で共に社会を支える役割を持ち、主役となれる存在といえる。

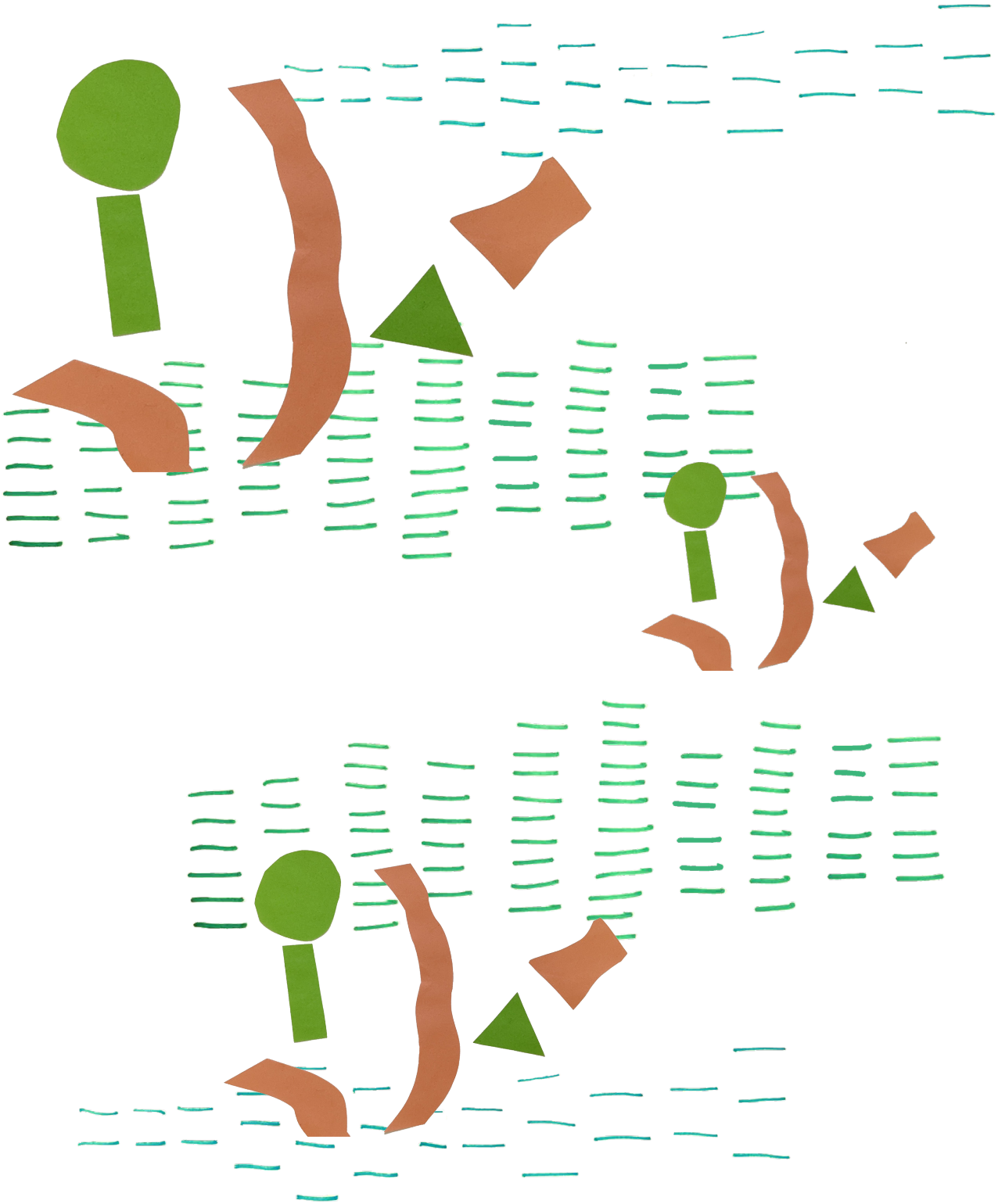
例えば、体に無害な「ダストレスチョーク」で業界トップシェアを誇り、従業員 94 人中 66 人が知的障がい者 (内 25 人が重度知的障がい者) が雇用され障害者雇用率 70％で知られる日本理化学工業株式会社（以下「理化学工業」）の故大山康弘会長が大切にされた※「４つの幸せ」の考えにより、そこで働く障がいのある方たちを含む全ての社員が、仕事を通じて個々の役割を持ち、主役となるべくやりがいを持って懸命に日々の仕事に取り組む中で、多くの幸せを得ているそうである。

今年 7/24（月）～ 7/28（金）の 1 週間ほど、アトリエ Fuu(以下「Fuu」) では在宅のご利用者様のご家族を中心に、ご都合の良い日に事業所に来所いただき、ご利用者様の活動の様子や事業所の取り組みに触れて頂く「家族ウィーク」を開催（4 名のご家族が参加）。当初 8/4（金）までの約 2 週間の予定は、新型コロナ感染予防対応から（法人内におけるコロナ感染防止の取り組みより）、結果的に 1 週間ほどの実施となるが、参加されたご家族様からは、「自分の役割がある様子が見れて良かった」「美味しそうな昼食を今度一緒に食べたい」など、対面交流ならではの率直なご意見をいただく良い機会となった。

コロナ以前、Fuu では大家様や区長様はじめ、近隣地域の方々やご利用者様のご家族・スタッフなど、大勢の関係者が交流するイベント（地域交流会や忘年会等）や外出の機会が多く、ご利用者様が自分の得意なことや好きな活動で地域の方と関わることが多かった。しかし、世界的な新型コロナの流行以降、活動中止や感染対策を講じた規模の縮小や中止等により、ご家族や近隣地域の関係者（自治会、学校、企業等）との交流の機会が減少。結果的に、ご利用者様の活動等の選択範囲が狭まり、自立に向けた取り組みにどこか閉塞感を感じる状況も少なくなかった。こうしたコロナ禍の模索期間を得て、今まで以上に「幸せ」や「人との関わり合い (地域交流)」を考える機会が増える中で、誰もが幸せを感じられる社会の実現には、好きなことや得意なことを通じて、地域の関係者とつながり、役割や遊び心（相手を思いやり共に楽しむ心）をもって出来ることから取り組むことが大切だと思う。

法人設立 45 年を迎える今年、私たち関係者はご利用者様を始め、地域で暮らすみんなの幸せづくりの応援と地域交流 (貢献) の輪を広げていきたい。今と未来を生きる誰もが幸せを感じられる社会を目指して。（アトリエ Fuu　阿部）

※「４つの幸せ」
故大山会長の導師 (住職) の言葉である「４つの幸せ」とは、1)「人に愛されること」2)「人に褒められること」3)「人に必要とされること」4)「人の役に立つこと」であるが、愛以外の３つを働くことを通じて得られるという（大山会長は働くことで愛される幸せをも得られるといわれた）



ひびのこと

かりがね福祉会の日中事業所の「風の工房」「アトリエ Fuu」「OIDEYO ハウス」で起きている、面白かったり、大変だったり、困ったり、嬉しかったり、そんな「ひびのこと」を様々な視点で切り取り発信していく新聞です。

KAZENOKOBO1989　OIDEYOHOUSE　ATELIER_FUU_

Vol.5：2023 年 10 月 10 日（金）　企画・編集：日中事業所連携会議

art by Otsuka Yoshimi & Koda Ryota